

# 「身体表現発表会における学生の意識の変動と学び」

松井 いずみ

## Changes in Students' Attitudes and Learning in the Process of Preparing for a Bodily Expression Performance

Izumi MATSUI

本論は、身体表現発表会における学生の意識変動について調査し、考察したものである。また、発表会終了後には学生の学びに対する意識調査を行い、身体表現発表会の包括的な学びについて考察した。各回の授業に於ける学生の意識の変動調査からは、全体平均の揺れは少ないものの、それぞれの学生の意識の揺れは大きく違い、指導者が適切な援助をしていく上で学生一人ひとりの状況を把握することが重要であることがわかった。また、学びに対する意識調査からは、表現技術だけでなく、コミュニケーション能力をはじめとする総合的な学びを得ていることが確認された。

キーワード 身体表現発表会 音楽リズム 学生の意識 学生の学び

### 1. はじめに

駒沢女子短期大学では保育科1年生による伝統行事として毎年12月に、道元禅師讃仰「身体表現発表会」が行なわれている。そして2016年12月には、記念すべき第50回身体表現発表会が開催された。1クラス約30人でひとつの演目を行ない、子ども向けの劇にダンスや合奏などを織り込み、総合的な表現発表を行なう。担当教員指導のもと、学生が主体となって脚本を書き、音楽の選曲や編集、ダンスの振り付けや指導、ダンボールを使用した大道具の制作や、衣装作りなどすべてを手掛けるため、授業だけでは時間が足らず、休み時間や放課後を使いながら準備をしていく。その過程では多くの話し合いが行なわれ、学生間での葛藤や迷いが生じ、同時に認め合い、協力しながら大きな成果を得る。

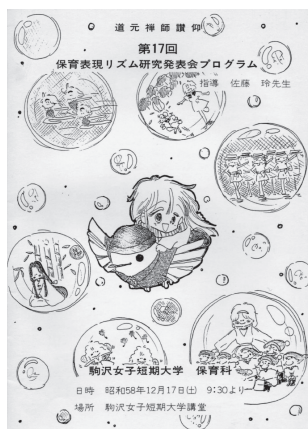
発表会場は約1500席ある大きなホールで、客席には付属幼稚園や近隣園の子どもたちとそ

の保護者、次年度入学予定の高校生、上級生や卒業生、学生の保護者など大勢招待しており、舞台は大きくマイクも使用しないため、学生らには相当の表現力が求められる。最初のうちは、学生の声は小さく動きもぎこちないが、舞台での練習が始まる頃には111名の誰一人として恥ずかしがる者はおらず、声を出し、客席に伝わるように大きな身体表現をし始め、更に学生同士で表現の研究をしながら成長していくようになる。ここで得た表現力と自信は、後の実習や社会生活に役立ち、学生らの大きな学びとなっている。

### 2. 身体表現発表会の歴史


身体表現発表会は、昭和40年「第一回音楽リズム発表会」開催に始まる。学園の60周年史には以下のように記されている。「幼稚園教育要領の基本方針に『のびのびとした表現活動を通して、創造性を豊かにするようにすること』

とあり、また、保育所保育指針の保育の原理に『いろいろな表現活動を通じて、創造性を養うこと』と記されている。これをうけて、幼稚園及び保育所の保育内容には『音楽リズム』『音楽』という領域が定められ、これに対応して、保育科のカリキュラムにも『音楽リズム』という科目が設けられている。昭和四〇年代から昭和五〇年度までの間は、藤田妙子、賀来琢磨・賀来



和子先生によって、この『音楽リズム』は担当されていた。昭和四〇年一月一日、藤田先生指導のもとに、第一回音楽リズム発表会が開催されて以来、毎年、一月二六日の道元禅師追善記念日・

#### プログラム

<p>開会式</p> <p>学長挨拶</p> <p>午前の部</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 劇『辛出冷羅』 美</li> <li>2. 『Black Space』 愛</li> <li>3. オベレック『あにまるんど』 敬</li> <li>4. 『SPACE OF LADIES』 善</li> <li>5. オベレック『ヘンゼルとグレーテル』 聖</li> <li>6. 『ひっくりかえったおもちゃばこ』 真</li> <li>7. オベレック『アルプスの少女ハイジ』 善</li> <li>8. 『ファンタジーランド』 敬</li> <li>9. オベレック『白雪姫』 真</li> <li>10. 『めざめ』 愛</li> </ol> <p>昼食 休憩</p> 	<p>午後の部</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>11. パンタイム劇『雪の女王』 聖</li> <li>12. 『THE・かぐや姫』 愛</li> <li>13. オベレック『ふしぎなだいどころ』 美</li> <li>14. 『Dream of you』 敬</li> <li>15. 劇『不思議の国のアリス』 真</li> <li>16. 『とびだせ チャチャチャ』 善</li> <li>17. オベレック『Just way you are』 聖 — 素顔のままで—</li> <li>18. 『Welcome DANCE PARTY』 美</li> <li>19. オベレック『青い鳥』 愛</li> <li>20. 『チキチキパンパン』 善</li> <li>21. オベレック『まちのわずろといなかのわずろ』 聖</li> <li>22. 『HEROIN』 美</li> <li>23. オベレック『Fairy Ring』 敬</li> <li>24. 『森のクリスマス』 善</li> <li>25. オベレック『Wonder Dream』 美</li> <li>26. オベレック『冬物語』 真</li> </ol> <p>閉会式</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実行委員長の言葉</li> <li>・講評</li> <li>・閉会の言葉</li> </ul>
---	---

(昭和58年12月17日 第17回音楽リズム発表会)

本学開校記念日をトして、学生の音楽リズム発表会を開催してきた。』(ママ)<sup>1</sup>



音楽リズム発表会

また、前身の駒沢高等保育学校、駒沢高等保育学校を経て駒沢女子短期大学保育科が設立された翌年、当時の短大主事であった野崎信洋先生が「短大1年の回顧」として、「十一月二十五日、十時より新講堂に於て、保育科全員第二回の音楽リズム発表を行う。幼、小の幼児、児童とその父兄を迎え、専門的照明技術の効果もあり、発表する学生個人は勿論入場者一同楽しい一ときを過し正午無事終幕、午後二時より藤田妙子先生を中心に反省会を開き、将来の幼稚園教師として研究討論を行い成果をおさめた。」<sup>2</sup>と記している。当初から客席に子どもたちとその保護者を招待し、子どもたちに楽しんでもらえるような演目を行なっていたことがわかる。

指導者は昭和51年から佐藤玲先生になり、「音楽リズム発表会」は平成2年に「身体表現発表会」へと名称を変える。<sup>3</sup>当時のプログラ

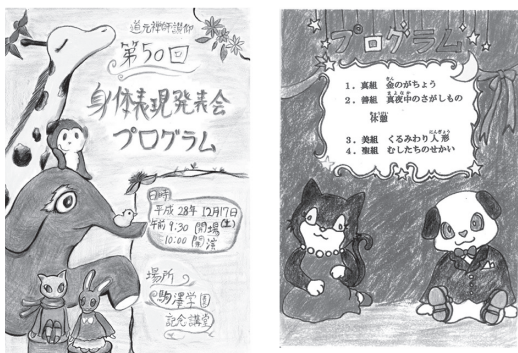


(平成18年12月16日 第40回身体表現発表会)

ムからは、午前・午後の部があり、多くの演目が上演されていたことがわかる。平成 18 年「第 40 回身体表現発表会」から指導者が宮崎恵先生へと受け継がれ、平成 25 年から筆者（松井）が指導を担当している。

### 3. 「第 50 回身体表現発表会」上演内容

「第 50 回身体表現発表会」は、2016 年 12 月 17 日（土）駒澤学園記念講堂にて開催された。上演プログラムと内容の概略は以下の通りである。



#### (1) 真組「金のがちょう」

グリム童話『黄金のがちょう』の中に、現代の流行であるキャラクターやお笑い、ダンスをアクセントとして散りばめた。また、町の者がお姫様を喜ばせようとするシーンでは、フルート演奏や、リボンを使った新体操を披露するなど、学生がこれまでに積み上げてきた技術を盛り込んだ。そして、人々がつながるシーンは、本当に離れなくなり不自由しているような様子



が身体の動きで表現されており、学生たちがよく研究し、何度も自主練習を重ねたことが伺えた。背景の大道具は大きな柱と王様の立派な椅子のみでお城の中を想像させるよう工夫されていた。

#### (2) 善組「真夜中のさがしもの」

絵本『くまのコールテンくん』(1975)<sup>4</sup>をヒントにしてストーリーを創作した。舞台に似たようなボタンをたくさん配置し、客席の子どもたちに探してもらうという参加型の演目である。また、ボタン探しの道中にくまが出会った人や物たちも、その過程で、それぞれに足りないもの「誰かの役に立つこと」「友だち」「仲良くすること」などを見つけていくストーリーである。演目の最後にはクラス 28 名全員で息の合った木琴合奏を披露した。



#### (3) 美組「くるみわり人形」

このクラスにはダンス経験者が多かったため、ダンスを多く披露できる演目に決まった。ただし、延々とダンスを見せているだけでは、子どもたちも飽きてしまうため、ストーリーを考えることに大幅な時間をかけた。音楽はチャイコフスキー作曲のバレエ組曲「くるみ割り人形」の中から数曲選び、各曲にダンスリーダーを配置した。クラスには当然、ダンス未経験者もいるため、振り付けや振りうつしに苦心している様子が伺え、互いにより勉強になったのではないと思われる。フィナーレの「花のワルツ」に合わせて、舞台の大道具や衣装は、花の

国をイメージした華やかな世界観が表現されていた。



#### (4) 聖組「むしたちの世界」

カマキリに怯えるアリたちを、学生が演じる音楽隊と客席の子どもたちの歌声で救うお話であり、アニメーション映画『バグズライフ』を元に創作した。授業回数を重ねるたびに、それぞれの役の愛らしさ、柔らかさ、迫力、規律正しさなど、キャラクターの表現が向上しており、一人ひとりの大きな成長が伺えた。アリ役からも、本当にアリを見ているような細かい動き、そして言葉を使わなくとも怯えている様子が身体の動きから伝わり、人数の多いアリ役の練習にはチームワークを必要としただろうと思われる。最後は客席の子どもたちも巻き込み、音楽隊の演奏に合わせて会場一体となって歌って踊り、幕を閉じた。



このように学生たちは素晴らしい舞台を披露することができたが、本番に至るまでには多くの学びがあり、その過程では試行錯誤や葛藤が繰り返されている。そこで各過程に於ける学生たちの意識の在り方をデータにし、整理することを試みた。

#### 4. 各回の授業内容と学生の意識の変動

##### (1) 目的と方法

身体表現発表会に対する学生の意識の変動を把握することにより、今後の適切な指導や援助につなげることを目的とする。

調査対象 短期大学保育科1年生 111名

調査時期 2016年10月～12月 全15回

調査方法 学生の身体表現発表会に対する学生自身の意欲の高さを1～100の数字に置き換え、記録カードに感想と共に記入させる。初回の意欲は全員40と設定した。(図1「学生一人ひとりの意識の変動」) 最終授業では「身体表

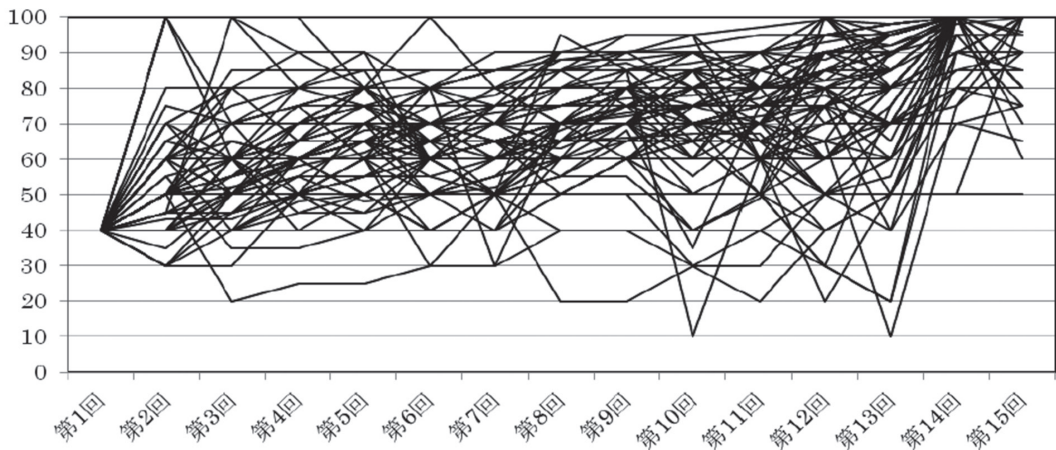


図1「学生一人ひとりの意識の変動」

現発表会で何を学びましたか？」という質問と共に単語をランダムに並べ、当てはまると思うものにマルをつけさせた。(図3「身体表現発表会での学び」)

## (2) 各回の授業内容概要

### ①「身体表現発表会」の意義と演目の検討

「身体表現発表会」の意義と目的についての説明後、演目の検討を始める。学生に対し、授業開始前の夏休みには劇場・テレビ・インターネットなどを利用し舞台芸術に触れておくよう事前に助言しており、学生は、絵本や児童書を調べながら、「演目の提案用紙」に、題名・内容概略・登場人物などを記入する。条件は〈子どもが楽しめる内容であること〉〈上演時間は20分程度であること〉〈クラスの全員に必ず役があり、舞台上で表現できること〉である。用紙は授業時間内に書き始め、仕上げは課題とする。学生からは「とても楽しみである」「自分の特技をいかしたい」「全員に配役するためのストーリーを創作することが難しかった」などの感想があった。

### ②演目の提案と決定

前回、学生全員から提出された演目の提案を元に、決定に向けて話し合いを始める。担当教員として〈場面の転換など、映画やドラマと違った舞台独特の表現について〉〈子どもたちに何を伝えたいのか考える〉などの助言をする。この過程での話し合いは大切であるため、できるだけ全員が発言できるように設定し、時には結論を出さず次回に持ち越すこともある。学生からは「自分が推薦した演目の良さを伝えきれなかった」「決まった演目について、もっと調べてみたい」などの感想があった。

### ③ あらすじの検討と担当係の決定

演目のテーマが決定したクラスから、大まかなあらすじを検討し、同時に必要な役を挙げていく。「こことこの辻褄が合わない」「これは

子どもにわかりにくいのではないか」「こうしたら面白くなる」といった意見が活発に交わされる。担当教員からは〈劇中に客席の子どもたちと関わるシーンを作りたいか〉〈フィナーレをどうしたいか〉という質問も投げかける。そして授業の後半で、「リーダー」「サブリーダー・タイムキーパー」「大道具係」「衣装係」「音響係」「脚本・書記係」「会場・運営係」「プログラム・写真係」「会計係」「ダンス・合奏係」といった係の仕事を紹介し、担当者を決める。まずはクラスメートからの推薦で、リーダー、サブリーダーを決定し、あとは全員が何らかの仕事をするよう配置していく。更に各係の中のリーダーも決める。全員が希望する係になれないこともあり、学生同士で話し合いながら譲り合って決めていく。

### ④ 役決めとあらすじの詳細検討

あらすじの決まったところから、配役をしていく。配役に合わせてあらすじを変更することもある。全員の役が決まったところで、学生一人一人が衣装やセリフ、動きを考え、自分の登場する部分について、その詳細を検討していく。プログラムは4演目あるため、担当教員はできるだけ他のクラスと同じような設定にならないように助言する。特に〈小人〉〈妖精〉〈お城〉〈森〉などが出てくるお話は多く、また、人気のBGMもある。それらを是非使用したいクラスが2クラス以上ある場合には、授業時間外に話し合う。

### ⑤ 台本読み合わせとあらすじの詳細修正

まずは教場の中で輪になり座った状態で台本を読み合わせていく。ほとんどの学生らは恥ずかしさが勝り、小さな声で棒読みをするが、この時点ではそれを楽しむこととする。読み合わせていくうちに、修正点が多く表出するため、全員で台本に赤ペンで書き込んでいく。学生の中で徐々にイメージが統一化されていき、大道具・小道具や、舞台設定を想像するようになる。

また、授業の中で各係の進捗状況を報告し合う時間を作り、見えないところで働いている人がいることを認識し合う。

#### ⑥ 立ち稽古の開始

床の広い教場を使い、上手(カミテ)下手(シモテ)を作り、舞台をイメージして動きながら台本を読む。この時点で良い発声をする学生や、動きの良い学生が何人かおり、クラスメートたちが影響されていく。担当教員からは〈本番はマイクを使わないため、できるだけ声を正面に飛ばすこと〉〈客席から見た時の立ち位置を考えること〉などを助言する。学生からは「実際に動いてみると、わからないところがたくさん見えてきた」「後ろを向いて声を出しても客席に届かないことがわかった」「想像以上に考えることが多く、驚いた」などの感想があった。

#### ⑦ フィナーレ、ダンスや合奏の検討

学生にはフィナーレで必ずしも全員でダンスや合奏をする必要はないことを伝え、どのように終わりたいか話し合いをする。演目の途中で全員で踊り静かに終わることもあれば、ストーリーの続きとして最後に盛り上がることもある。決定次第、曲の選定を始める。そして、この発表会は、学園から活動補助金をいただいているため、会計処理の注意事項を丁寧に説明する。この頃から休み時間や放課後を利用した学生の自主練習が始まり、それと同時に学生間に温度差が発生し始める。また、学生らは「造形Ⅱ」の授業で段ボールを使った大道具制作を始めている。

#### ⑧ 通し稽古と舞台への大道具搬入

この回からは台本を持たず、セリフを暗記した状態で細かい動きを作る。学生同士で相談をしたり、演技直しをしながら試行錯誤し、場面ごとに検討を重ねていく。担当教員は〈セリフに頼らず動きでも表現が伝わるように〉〈普段の生活ではしない大きな動きも、舞台上では

わかりやすい表現になる〉などの助言をする。同時にピアノや小物楽器を使った効果音を入れたり、BGMを流しながら、次回からの舞台練習に備える。そして、休み時間や放課後を利用しながら、できあがった大道具を造形室から記念講堂の舞台へと運ぶ。

#### ⑨ 舞台練習 1

記念講堂使用上の注意事項を細かく伝える。学生は初めて舞台に乗り、会場の大きさと自分の表現力との差に気づく。まずは、大道具を配置した上で、学生一人一人が舞台上での立ち位置を確認し、次に客席からの見え方を確認する。学生からは「大道具を舞台に置いてみたら作った時より小さく感じた」「ホールが大きいのでセリフをもっとはっきりゆっくり言わないといけない」「隣の人が遠く、一人で舞台に立っている気持ちだった」などの感想があった。

#### ⑩ 舞台練習 2、大道具の移動練習など

学生は演じながら同時に大道具の移動、BGM操作、中割カーテンの操作などを行なうため、本番でスムーズに動けるように練習を重ねる。また、演技の邪魔にならないよう、BGMの音量調節を念入りに行なう。この頃には、学生同士で演技を確認し合い、声をかけ合うようになっていく。また、工夫を重ねることで、上演時間が長くなりがちであるため注意させる。

#### ⑪ 完成舞台の DVD 鑑賞

昨年度の舞台を DVD で鑑賞する。以前にも他の演目を鑑賞しているが、この段階で改めて鑑賞することにより、これまでと全く違う視点で観ることができ、学生は自分たちの現在の完成度との違いに愕然とし、その後の練習の仕方に大きな変化が生じる。また、学生が人間関係に悩むなど疲れ始める頃でもあるため、本発表会の目的を再度確認させ、残りの 10 日間を有意義に過ごすよう激励する。

## ⑫ リハーサルと照明合わせ

午前中に、本番と同じ時間設定で衣装を着て通し稽古をし、初めて舞台照明を使う。学生は自分のクラス以外の演目も初めて観ることになり、大きな刺激を受ける。全員全クラスに対して「良かったところ」「疑問点、改善点など」を用紙に記入し提出する。午前中の演技をDVD録画し、お昼の時間帯に上演会を行なう。学生は自分の演技を鑑賞しながら反省会を行ない、修正点を話し合い、午後には再演をする。

## ⑬ 最終調整

本番前最後の授業であるため、照明、音響、衣装、大道具などの最終確認をしながら本番に備える。学生の感想からは、期待と不安が感じられる。また、本番当日の注意事項を伝え、受付や案内など運営上の打ち合わせを行う。

## ⑭ 本番

客席に子どもたちがいることで、学生のモチベーションは一気にあがる。これまで何度も練習を重ねてきたため、緊張する学生は少なく、のびのびと楽しそうに演じる。幕が閉まる時には達成感で涙を見せる学生が多い。本番後は学生を称え、全員で大道具の解体と片付けと会場の掃除を行なう。

## ⑮ 振り返り

本番のDVDを鑑賞後、全員発言する時間を

設定する。ほとんどの学生がクラスメートに対して感謝の気持ちを述べる。お客様からいただいた感想を紹介した後、授業の全記録と感想のまとめ、レポート課題を出して授業を終える。

## (3) 結果と考察

### ①「各回の授業における学生の意識調査」について

学生一人ひとりの数値を検証したところ、それぞれの意識の揺れには大きな違いがあり、一概に表すことは難しいということがわかった。(図1「学生一人ひとりの意識の変動」)

そこで、ランダムに4人の学生を選出し、彼らの事例を元に意識変動を考察する。(図2「各回の授業内容と学生の意識の変動」)

#### A子

学生の中で一番多い変動パターンであった。第1回～第10回まで紆余曲折しながらも緩やかに上昇し、第11回で昨年度の舞台との差に不安と焦りを覚える。第12回のリハーサルで大きく落ち込む学生も多く、その不安感がクラスメートや担当教員への不満に変わることがある。その後、クラス全体が団結するため、本番へ向けて意欲は一気に高まる。

#### B子

演目が決まった直後から積極的に動き、休み時間や放課後の遅い時間まで、他の学生よりもよく活動していたため、前半で一気に意欲が高

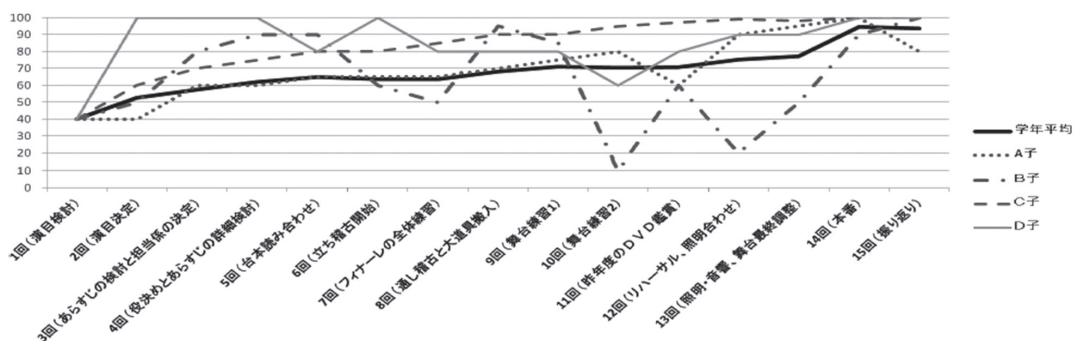


図2「各回の授業内容と学生の意識の変動」

まる。しかし、クラスメートとの温度差に対して早い段階から不満が募り、やがて自分自身の性格について熟考し、本人の中で折り合いをつけるようになる。周りの学生からは一目置かれる。よく動いている分、本人の働きが本番の舞台に反映されるため、達成感は一倍大きい。

#### C子

状況の変化にあまり動じない学生や、多くのことをポジティブに捉えることができる学生、コミュニケーション能力の高い学生の場合、全体的にこの行事を楽しむことができ、C子のような意識変動のラインを作る。C子の記録カードには「ワクワクしている」「楽しみです」「良い刺激になった」「まだまだいける!!!」などの前向きな言葉が並ぶ。本番の舞台からも楽しくて仕方がない様子が伝わる。

#### D子

素直な学生で、授業2回目から既に意欲が高まりは100%になるが、途中で数々の現実的な問題に直面し、数値は少しずつ下がっていく。しかし舞台での練習が始まる頃からやる気が勝り、本番で活躍をする。

全体平均の数値は、授業回数を重ねるごとに緩やかに上昇し、本番で急上昇した後に、振り返り授業では緩やかに下がっていた。(図2「各回の授業内容と学生の意識の変動」)これは、本番が終わってしまって寂しいという気持ちや、落ち着いた気持ちの表れでもあろう。

#### ②「身体表現発表会での学び」について

最終授業時に身体表現発表会での学びについて意識調査をしたところ、学生自身が学んだと感じている項目の1位は「意見を言うことや伝え方」(80%)で、「表現方法」(77%)を上回った。(図3「身体表現発表会での学び」)学生らの感想文には「中学高校時代にはなるべく意見を言わないようにしてきたが、勇気を出して自分も意見を言ってみたら、聞いてもらえてとても嬉しかった」「修正点に対して言葉をよく選

んで伝えたところ感謝された」「小さなことでも言葉にして褒めるようにした」など、自ら発信する喜びを得ることができ、その方法を学んでいることがわかった。次に「協調性」(75%)と「色々な人の性格を知ること」(71%)を選ぶ学生が多かった。友人のこれまで気づかなかった意外な一面を垣間見たり、普段接触の少ないクラスメートとの深い関わりがあったことがわかる。その他、学びが大きいとされた項目は、「積極性」(70%)「周りの人への感謝」(70%)「造形の技術」(68%)「工夫や発想力」(67%)「忍耐力」(63%)であった。舞台上での表現技術だけでなく、コミュニケーション能力をはじめ

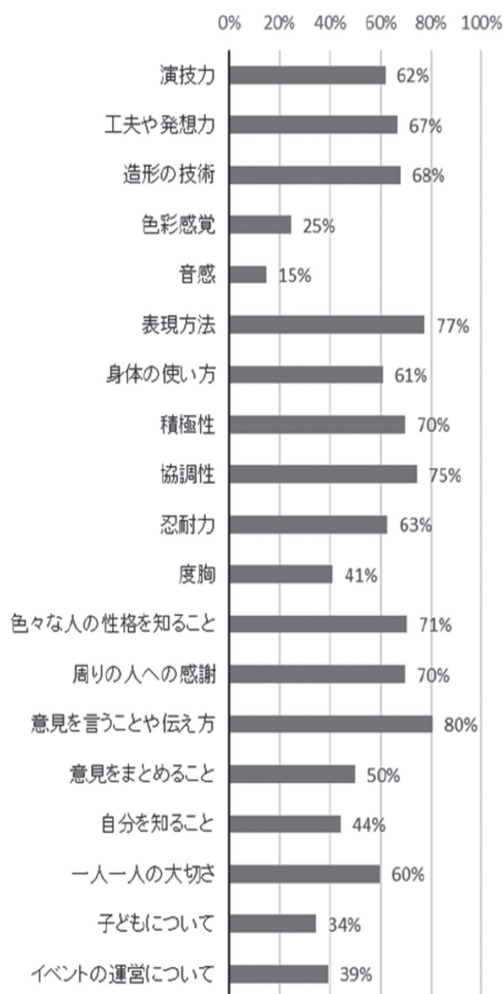


図3「身体表現発表会での学び」



とする人との関わりや社会的な学びなど、多くの学びを得ていることが明確になった。

## 5. まとめ

これまで身体表現発表会に向けて準備を進め  
る中で、学生らの喜びや悲しみ、期待や不安と  
いった気持ちの揺れや、それに伴う意識の変動  
を感じながら関わってきた。そしてその意識の  
変動が大きい故に、他授業とは違った特有の学  
びがあると考え、本研究に至った。

学生らに、意欲の高さを数値化したものと感  
想を毎授業提出させることにより、これまで表  
面化していなかった状況や、学生の細かい気持  
ちの揺れや迷い、小さな喜びを知ることができ  
た。記録カードは記名式であるため、本心を記  
録していない学生が存在する可能性もあり、ま  
た、意欲を数値化する作業は抽象的であるため、  
正確であるとは言い難いが、できるだけ学生の  
状態を認識することで、一人ひとりに合った指  
導に近づけることができると思われる。この調  
査を始めるにあたり、学生が記録カードに素直  
な気持ちで記入し、指導教員に心を開くことが  
できるような信頼関係が必要だと感じたため、  
記録カードにはコメントを返すなど、毎週必ず  
丁寧に目を通したとわかるような痕跡を残すよ  
うに心がけた。

各回の授業に於ける学生の意識の変動調査結  
果では、一人ひとりの意識の揺れは予想以上に  
多様であったが、学年平均を算出したところ、  
全体の意識の揺れは少なかった。この結果から、  
全体を漠然と見ているだけでは気づかないこと  
が多く、学生一人ひとりの状況を把握すること  
により、よりの確な声掛けや援助ができ、時  
には見守ることができるということがわかる。

また、身体表現発表会での学びの調査結果か  
らは、準備の過程で学生らは表現以外にも多く  
のことを学んだと感じていることがわかった。  
もちろん表現力が伸びていることは指導者から  
も目に見えてわかるが、「協調性」(75%)「積  
極性」(70%)「周りの人への感謝」(70%)や「一

人ひとりの大切さ」(60%)を感じることがで  
きたという結果は大変意義深いと考える。この  
包括的な学びは後の実習や就職後にも生かされ  
るだろう。

本研究結果を指導に反映させ、学生の学びが  
より深いものになるよう援助し、この伝統ある  
行事への更なる貢献につなげていきたい。また、  
今後はこの結果をもとに他授業との比較を行な  
い、探求を続けていきたいと考える。

## 参考・引用文献

- 1 駒沢学園 60 周年史編集委員会編『駒沢学  
園 60 周年史』1987、p.178
- 2 駒沢学園広報部編『無憂華第二十号』  
1967、p.159
- 3 駒沢学園広報部編『無憂華第二十八号』  
1990、p.220
- 4 ドン・フリーマン作/絵、松岡亨子訳『く  
まのコールテン』偕成社、1975

